

青年期の抑うつと対人関係に関する研究の概観

丸 山 笑里佳¹⁾

青年期は生物学的な変化と心理社会的な変化が同時期に生じるために、抑うつ状態に陥りやすい発達段階である。厚生労働省が、本邦の10歳以上を対象に、抑うつ状態を測定する尺度であるCES-D (Center for Epidemiologic Studies Depression Scale) を用いて行った調査によると、10~24歳の年齢段階の抑うつ得点が、他の年齢段階よりも高いことが明らかになっている(中根・本田, 2001)。加えて、傅田ら(2004)の調査では、中学生の22.8%が高い抑うつ状態を示していると明らかにされた。さらに、近年行われた欧米の疫学調査では、青年期の抑うつが、以前と比較して増加していることが示されている(Fichter, Xepapadacos, Quadflieg, Georgopoulou & Fthenakis, 2004; Collishaw, Maughan, Goodman & Pickles, 2004; West & Sweeting, 2003など)。丸山(投稿中)が中学生を対象に行った縦断調査では、中学1年生2学期から、1学期ごと、4ヶ月おきに計7回行われた調査の中で、抑うつ群は22.7%~26.7%(男子11.6%~19.0%, 女子27.9%~33.6%)で推移していた。さらに、約半数の生徒は、中学校生活の間に一時的に抑うつ状態となることが示されている。

抑うつと適応障害には関連が指摘されており、野添・古賀(1990)は、不登校児のストレス反応として抑うつが顕著にみられることを報告している。一方、青年期に抑うつ状態が高い者は、成人期にうつ病を発生する率が高い(Hays, Wells, Sherdourne, Rogers & Spritzer, 1995)。加えて、抑うつ状態に起因する対人関係や社会生活の障害は、子ども達の発達に影響を与える可能性が高い。これらのことから、青年期の抑うつについて理解することは、青年期のメンタルヘルスを考えるうえで重要であり、青年期の抑うつは軽視できない問題である。

これまで、抑うつに関連する要因の研究が数多くなされてきた。Barrett & Turner (2004)は、個人・家族・環境の3つの領域から、青年期の抑うつに関連する様々なリスクファクターを述べている。石川・戸ヶ崎・佐藤・佐藤(2006)がこれらをまとめて、①個人的な要因、

②社会的要因、③認知的要因、④家族の要因、⑤外的な出来事の原因の5つに分類している。①個人的な要因には、遺伝的脆弱性・他の障害の存在・以前の抑うつエピソード・不安障害の存在・慢性的な病氣、②社会的要因に、社会的スキル・社会的問題解決、社会的なサポート、③認知的要因には、ネガティブな帰属スタイル・認知の誤り・ネガティブな自己知覚、④家族の要因に、親の感情障害・親の養育態度・家族関係・夫婦関係、⑤外的な出来事の原因に、ネガティブなライフイベント・日常生活で生じる些細で不快な出来事が挙げられている。青年期の抑うつに関連する要因は様々に述べられているが、おおよその分類にそって述べることができるだろう(Hammen & Rudolph, 2003; Garber, J 2006)。これらの要因をさらに大きく分類するならば、子どもの個人内要因(気質、帰属スタイルといった認知的・行動的要因)と、環境要因(親子関係や友人関係の質)とも考えることが出来る。

「外的な出来事の原因」、つまり、心理的なストレスが原因となって抑うつ状態が引き起こされることは、これまでに数々の研究から明らかにされてきた(Brown & Harris, 1978; Ge, Frederick, Lorenx, Conger, Elder & Ronald, 1994; Nolen-Hoeksema, Gircus & Seligman, 1992など)。日常生活で起こる数多くのストレスの中でも、抑うつとの関連が強いとされているものが、対人的な文脈からのストレスである(Cole, Martin, Powers & Truglio, 1996; Rudolph & Hammen, 1999)。Eley & Stevenson (2000)の双生児研究では、友人関係や家族関係でのトラブルがあることが、抑うつに影響を与えていた。

学校において生活の大半の時間を過ごす中学生にとっては、友人関係は、対人関係の重要な側面である。そこで、本論文では、青年期の友人関係の発達の特徴と重要性について整理した上で、友人関係に関する諸問題と抑うつや精神的健康についての研究を概観したい。また、今後の研究に必要な視点の提案を行いたい。

なお、本論文では、臨床診断が必要となるうつ病ではなく、抑うつ状態を取りあげることにする。²⁾

1)名古屋大学教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

1. 青年期の友人関係の発達的特徴と重要性

青年期における友人関係の特徴として、親友の出現が挙げられる(難波, 2004)。落合・斎藤(1996)は、友人との付き合い方の発達的变化を検討し、青年期のはじめには、「浅く広くかかわる付き合い方」が多く見られるが、年齢を増すにつれて少なくなっていく、反対に、「深く狭くかかわる付き合い方」が多くなっていくことを明らかにした。つまり、青年期の対人関係は、数人の親友と深く関わっていくスタイルへ変化していく過渡期にあるといえるだろう。

このような親友の出現は、発達上、重要な側面を持っている。Sullivan(1953)は、中学生にみられるような子ども同士のグループから生まれた親密な友人関係が、発達上重要であることを指摘した。宮下(1995)は、親しい友人を持つことの意義について、精神的な安定化、自己理解、人間関係を学ぶという3点を挙げている。また、Blos(1962)は、青年が親の影響から分離し、心理的に独立する過程を「第二の分離個体化」として重要視して

2)「抑うつ」という用語を用いる場合、心理学的・精神医学的ではおおむね3つの意味で用いられる。気分(mood)としての「抑うつ気分」(depressive mood)、抑うつ症状(depressive symptoms)のまとまりとしての「抑うつ症候群」(depressive syndrome)、疾病単位としての「うつ病」(depressive disorder)である(坂本・大野, 2005)。近年の抑うつ研究では、臨床群ではなくても、抑うつ症状をもつ人がいることが明らかになっており、抑うつ状態・うつ病は、一般の人々とかけ離れた精神病症状ではなく、誰にでも起こり得て、健常な個人の心理と連続的な気分の異常であるということが理解されている(風祭, 2000)。もちろん、うつ病と抑うつ状態が連続的かどうかの判断には、さらなる研究の蓄積が必要とされるが(坂本・大野, 2005)、成人の抑うつ研究では、うつ病としての診断基準を満たさないが、抑うつ自己記入式質問紙で高得点になる人は、臨時的・機能的に重大な障害があることが指摘されている(Gotlib, Lewinsohn, & Seeley, 1995)。また、斎藤(2005)は、青年期の精神病理について、非常に流動的で重症度が変化しやすく、青年期発達の諸段階の特徴を反映した一過性・反応性の現象か、精神疾患によるものかは経過を追わないと確定できないと述べている。これらのことから、青年期の抑うつ状態は、精神疾患を伴うものであるかどうかの判断は難しいが、質問紙を使用することである程度の重症度を測定することができ、そのことに意味があると考えられる。

おり、皆川(1980)は、第二の分離個体化過程において、親に代わる依存愛情欲求・同一化の相手として同性の友人と相互依存の関係を形成できるか否かが、適応障害など、青年の様々な問題と関連しているとしている。

斎藤(2005)は、青年期のうち、特に思春期の子どもたちの特徴を述べている。子どもたちは、親離れの過程において、仲間関係や親友関係、教師との関係といった外界での関係性を利用して親離れに耐えていくが、より多くの支援を求めするために「過剰適応」を強化する。この過剰適応という姿勢は、社会的失敗の感受性を過度に高めるため、しばしば外界での些細な失敗の過大評価を生むことになり、驚くほど決定的な挫折となる。個人差があるものの、対人関係での脆弱性や過敏性は、この発達段階に特有な共通の心性である(斎藤, 2005)。

また、友人関係の持ち方には性差がある。長沼・落合(1998)は、青年期の友達との付き合い方には「友達との付き合いの深さ」と、「相手との心理的接近の仕方」という二次元があったとした。その中で、女子は、同性の友人と密着した関係を持つことが特徴として挙げられた。性別により友人に対する関心ごとは異なり、男子は友人同士で、スポーツや競争的なゲームなどの、力・行動・支配を中心とした活動や会話を多く持ち、女子は自己開示や親密性を重視した交流や、共有を中心とした活動や会話が多い(Buhrmester, 1996)。同様に、女子の友人関係は、少人数での、自己開示と親密さが特徴の関係であり、男子の友人関係は、大人数の仲間集団の中での価値や達成、尊敬が特徴の関係である(Gabriel & Gardner, 1999)。そして、男子は相手に頼ろうとしない付き合い方をする、あるいは、友人とは独立した意識をもつ(和田, 1996)。一方、女子は、同じように感じてくれる、あるいは、悩みを打ち明けることができることを友人に期待し、男子に比べて依存傾向が強い(榎本, 1999)。さらに女子は、男子に比べると、情緒的サポート源として友人関係を利用している(Buhrmester, 1996; Cross & Madson, 1997)。

女子は、友人関係のストレスを多く経験し、さらに、友人関係でのストレスに対して過敏性・脆弱性があり、抑うつ状態に陥りやすいという指摘がある(Ge et al, 1994; Rudolph & Hammen, 1999; Goodyer & Altham, 1991; Rudolph, 2002; Hankin, Mermelstein, & Roesch, 2007)。ストレスの多さ、過敏性や脆弱性の背景には、友人関係の特徴の違いが関係していることが示唆されている。女子は、友人関係において親密さが重要視されるため、友人関係に過敏になり、さらに、トラブルが生じた際のストレスが高いことが推測される。

以上に述べたように、青年期の友人関係は発達上、重

要な側面を持っている。また、その特徴から、青年期は対人関係での脆弱性や過敏性を持ち、友人関係の特徴の違いから、女子は過敏性・脆弱性が高い。

2. 友人ストレスに関する、抑うつ研究の概観

青年期の子どもたちのストレスを扱った研究では、友人関係からのストレスに焦点が当てられることが多く、このことから、青年期の適応や精神的健康を考える際に、友人関係が重要であることが伺える。菊島(1999)は、友人及び集団行動のストレスや対教師ストレスを不登校の直接的要因としてあげている。また、平田・菅野・小泉(1999)は、不登校生徒では、学級での孤独や孤立を感じている生徒の割合が高く、同輩集団での人間関係に困難があることを示唆している。大久保(2005)も、友人との関係が学校での適応感に強く影響を与えていることを明らかにした。

中学生を対象とした調査では、友人関係のストレスサーが抑うつと関連することを指摘した調査が数多くある。また、友人関係でのストレスは、男子に比べると女子のほうが多く経験していることも明らかとなっている(岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992; 高倉・崎原・與古田・新屋, 2000; 山本・中田・小林, 2000; 田中, 2006; Rudolph & Hammen, 1999; Rudolph, 2002; Hankin, Mermelstein, & Roesch, 2007など)。

友人ストレスや、抑うつをはじめとするストレス反応の研究には、媒介変数・先行要因となる変数を、関連する要因として検討しているものが多い。また、その場合には、複数の要因を同時に検討しているものがほとんどだった。関連する要因としては、ソーシャルサポート、友人関係目標・目標志向性・達成動機などの動機づけ、パーソナリティ、コーピング、ソーシャルスキルが挙げられる。これらの研究について、本邦の中学生を対象とした研究の知見を概観したいと思う。

パーソナリティ・気質

田中(2006)は、Cloningerのパーソナリティ理論の気質因子である損害回避と、身体的発達、および、ネガティブライフイベントが、中学生の抑うつに及ぼす影響について検討を行っている。損害回避は不安の感じやすさ、悲観しやすさを表す気質特徴のひとつで、抑うつとの関連が指摘されている(Farmer, Mahmood, Redman, Harris, Sadler & McGuffin, 2003; Richard, Thomas, Edward & Cloninger, 2003; Jylha & Isometsa, 2006; Tanaka, Sakamoto & Kijima, 1998)。田中(2006)の調査では、岡安・嶋田ら(1992)の学校ストレスサー尺度を参考にし、ネガティブな出来事の有無をたずねた。また、ネガティブな出来事があった場合には、その出来事

に対しての嫌悪感を評定させている。その結果、損害回避とネガティブライフイベントの嫌悪感の間に交互作用がみられ、ネガティブライフイベントの嫌悪感が増加すると、損害回避の高い中学生は、損害回避の低い中学生よりも抑うつが高まることが明らかとなった。また、損害回避の高い特徴を示す中学生は、ネガティブなライフイベントの中でも特に、友人関係における問題での嫌悪感を持ち、抑うつに対してより影響力のある変数として示唆された。

抑うつの発生や維持には、もともとの脆弱性である素因と、環境因としてのストレスサーの両方が関与していると考えられている(坂本・大野, 2005)。損害回避の気質特徴が素因としてはたらく、ストレスサーへの嫌悪感を増す働きと、ストレスサーが生じた際のストレス反応を増強させる働きをしていることが示唆される。

動機づけ

黒田・桜井(2003)は、友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介入するメカニズムを検討した。その際、ネガティブな出来事だけでなく、ポジティブな出来事についても検討を行っている。目標志向性とは、生活の様々な場面における「行動の目的」や、「目指していること」であり、「その達成に向かって個人の認知・行動・感情を方向付けるもの」と定義されている。その結果、目標志向性は、向社会的行動や関係構築・維持行動を媒介して、ポジティブな出来事の認知に影響し、抑うつを減少させていたことが明らかになった。ネガティブな出来事と抑うつとの関係には、目標志向性は関連していなかった。

ソーシャルスキル

戸ヶ崎・岡安・坂野(1999)は、社会的スキルを円滑な人間関係を営むために必要な行動と、人間関係を阻害する行動の二側面から測定し、社会的スキルのパターンと学校ストレスサーの評価、および、ストレス反応の表出との関連を検討している。その結果、社会的スキルの関係参加行動が低い生徒は、学校における友人関係に対してストレスを強く感じており、様々なストレス反応を強く表出する傾向にあることが明らかとなった。

今津(2005)は、女子中学生を対象に、6週間をおいたパネル調査を実施し、社会的スキルの不足がストレスサーと関連して抑うつに影響を及ぼす過程を検討している。その結果、社会的スキルの不足している生徒は、抑うつになりやすいというだけでなく、ストレスサーの衝撃性が高いときに、より抑うつを増大させやすい傾向を持つことが示された。これらの結果から、ソーシャルスキルの不足と抑うつ状態との関連は、二つの側面があることが示唆される。ひとつは、社会的スキルの不足は、

円滑な友人関係を送ることを困難にさせ、友人関係のストレスを増す。その結果、抑うつが増加することにつながる。二点目は、社会的スキルが少ないことで、ストレスが生じた際に得られる、友人からの情緒的サポートが少ないこと、加えて、トラブルを解決することが出来にくいことが、結果として抑うつを増加させるという側面が考えられるだろう。

ソーシャルサポート

ソーシャルサポートを多く受け入れている人は、抑うつ感に陥ることが少ないという知見から、ストレスから生じるストレス反応や抑うつに対する緩衝効果を検討した研究と、抑うつとソーシャルサポートの間に媒介変数を仮定して検討を行っている研究がある。

岡安・嶋田・坂野 (1993) は、中学生に知覚されたサポートと学校ストレスの関連を検討し、女子のほうが、男子に比べてサポートが有効であることを明らかにした。しかしながら、「抑うつ・不安」と「身体的反応」に関しては、男女に共通して軽減されにくい反応であることが明らかになっている。そのため、学校ストレスの中で、友人関係のストレスと抑うつ・不安との間にも、サポートの有効性は示されていないかった。

一方、水野・石隈・田村 (2003) は、中学生の適応とサポートの関連について、実際に受け取ったサポートに注目して検討を行っている。友人からのサポートの多い生徒は、友人との関係で生じる問題を解決し、適応得点を高めていることが明らかとなった。

堀野・森 (1991) は、ソーシャルサポートが、援助をめぐり送り手と受け手の相互交渉の問題であるとして、抑うつとソーシャルサポートの間に達成動機の変数を仮定して検討を行った。その結果から、抑うつとソーシャルサポートとの関係には、達成動機の質が介在することが明らかとなっている。

ソーシャルサポートの研究からは、ソーシャルサポートと抑うつ反応の間に統一した関連が見出せていないのが現状である。この背景には、ソーシャルサポートの評価を、知覚したサポートとするか、実際に享受したサポートとするかという点の違いがあるだろう。実際に、教育現場での介入を考える際には、ソーシャルサポートは重要な要因であると考えられる。今後、知見を積み上げていくことが望まれるだろう。

3. 今後の課題と展望

本論文では、青年期の友人関係の発達の特徴と重要性を整理した。加えて、友人ストレスが、抑うつや精神的健康に与える影響について、関連する要因の先行研究を概観した。青年期は、ストレスが増加する発達段階であ

る。この背景には、ストレスの増加と、ストレスに対する過敏性の増加という二側面があるだろう。青年期にある子どもたちの抑うつについて考える際には、岡安ら (1993) が述べているように、ストレスを除去することよりも、むしろ、ストレス過程に関する要因を操作するほうが現実的で、有効であるかもしれない。一般の中学生を対象として、抑うつ予防や不適応予防を目的とした予防プログラムの実践研究も少しずつ行われ始めている (三浦, 2006)。効果的な予防プログラムの作成を目指すためにも、本邦において、青年の抑うつに関する基礎的研究は欠かせない。特に、どのような要因がリスクファクターとなり、どのような要因が抑うつを軽減させるのかといった研究の蓄積を行うことは必要不可欠である (石川・戸ヶ崎ら, 2006)。よって、青年期の抑うつに大きく関与している友人関係のストレスと、抑うつ反応に関連している要因の検討、さらに、そのメカニズムの検討は、今後、青年期の抑うつ予防に重要になるだろう。

最後に、今後の研究に対しての示唆を三点述べたいと思う。まずは、縦断研究の重要性である。本邦での抑うつ・精神的健康・ストレス反応に対する研究では、ストレスの程度や嫌悪感、ストレス反応である抑うつという要因に加えて、関連すると仮定される複数の要因をあわせて調査していることが多い。このような研究の積み重ねから、抑うつに関連する要因が数多く挙げられ、いくつかのモデルが提案されてきた。しかしながら、これまで行われた調査研究は、横断的な検討にとどまっているものがほとんどである。本邦でも、縦断研究の重要性が指摘されており (天岩, 2004)、少しずつ増えてきているのが現状である。抑うつ状態に陥り、反応がネガティブに偏るために生じている結果であるのか、それとも、緩衝効果を仮定したり、先行要因・媒介要因として結論づけることが出来る結果であるのかを判断するためには、横断的な調査で得られた知見を基に、縦断的な検討を行うことが必要不可欠となる。また、適応や精神的健康の研究においては、個人が生きて、生活している個人や対人的関係のダイナミックな分析及びそのような状況の認知についての把握が欠かせない (天岩, 2004)。よって、ストレスや抑うつ、社会的スキルなど、変化や発達が想定される要因には、個人々人の変化・発達を考慮することができる方法での検討が望まれる。例えば、潜在成長曲線モデルやHLM (Hierarchical Linear Modeling) の利用を検討していく必要があるだろう。このような分析を利用した論文には、Kim & Cicchetti (2006) や Nezlak & Allen (2006)、Benjamin et al (2007) などがある。

二点目に、ストレスと抑うつとの関連には、双方向性があるのではないかという点を考えたい。ストレスサーやストレスと抑うつとの因果関係については、さまざまな議論がなされている。例えば、ストレスサーが抑うつの原因となることが先行研究で明らかにされている一方で、抑うつ的な人ほどストレスを多く感じることも明らかにされている (Hammen, 1991; Hammen, 1992)。つまり、ストレスは、抑うつの原因だけでなく結果にもなりえるものであり、循環的であると考えることもできる (Hammen & Rudolph, 2003)。また、このような視点で、抑うつと関連する要因についても同様に考えることができる。抑うつ的な子どもは社会的ではなく、アサーティブではなく、敵対的な問題解決方略をとることや、友人からの回避が多くなることが明らかとなっている。その結果、孤立してしまい、さらに抑うつを高めるという悪循環が起こることが示唆される (Altmann & Gotlib, 1988; Rudolph, Hammen & Burge, 1994 など)。今後、要因同士の関連や変化、相互作用を詳細に検討していくことで、悪循環を断ち切るための予防への示唆となることが望まれる。

最後に、抑うつ研究には、予防だけでなく、回復への視点も重要である。石毛ら (2005) も、回復する過程の研究の必要性を述べている。抑うつが発生や増加だけでなく、維持、軽減・回復のプロセスや、それらに関連する要因について検討することも、青年期の子どもたちの精神的健康を考えていくことに欠かせないといえる。

引用文献

- 天岩静子 (2004). 児童・生徒の発達研究の動向. 教育心理学年報, 43, 48-57.
- Altmann, E. O., & Gotlib, I. H. (1988). The social behavior of depressed children: An observational study. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 16, 29-44.
- Barret, P. M., & Turner, C. M. (2004). Prevention of childhood anxiety and depression. In P. M. Barret & T. H. Ollendick (Eds.), *Handbook of interventions that work with children and adolescents: Prevention and treatment*. Chichester, England: John Wiley & Sons Ltd. Pp.429-474.
- ブロス P. 野沢英司 (訳) (1971). 青年期の精神医学 誠信書房 (Blos, P. (1962). *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*. New York: Free Press.)
- Brown, G. W., & Harris, T. (1978). *Social origins of depression: A study of psychiatric disorders in women*. New York: Free Press.
- Buhrmester, D. (1996). Need fulfillment, interpersonal

competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), *The Company They Keep: Friendship in Childhood and Adolescence*. New York: Cambridge University Press. Pp.158-185.

- Cross, S. E., & Madson, L. (1997). Models of the self: Self construal and gender. *Psychological Bulletin*, 122, 5-37.
- Cole, D. A. Martin, J. M., Powers, B. & Truglio, R. (1996). Modeling causal relations between academic and social competence and depression: A multitrait-multimethod longitudinal study of children. *Journal of Abnormal Psychology*, 105(2), 258-270.
- Collishaw, S., Maughan, B., Goodman, R. et al. (2004). Time trends in adolescent mental health. *Journal of Child Psychology & Psychiatry & Allied Disciplines*, 45, 1350-1362.
- 傳田健三・賀古勇輝・佐々木幸哉他 (2004). 小・中学生の抑うつ状態に関する調査 —Birlson 自己記入式抑うつ評価尺度 (DSRS-C) を用いて—. 児童青年精神医学とその近接領域, 45, 424-436.
- 傳田健三 (2004). 児童・思春期のうつ病の現在. 臨床精神医学, 33 (4), 437-443.
- Eley, T. C. & Stevenson, J. (2000). Specific life events and chronic experiences differentially associated with depression and anxiety in young twins. *Journal of abnormal child psychology*, 28(4), 383-394.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化. 教育心理学研究, 47, 180-190.
- Farmer, A., Mahmood, A., Redman, K., Harris, T., Sadler, S., McGuffin, P., (2003). A sib-pair study of the Temperament and Character Inventory in major depression. *Archives of General Psychiatry*, 60, 490-496.
- Fichter, M. M., Xepapadakis, F., Quadflieg, N., Georgopoulou, E. & Fthenakis, W. E. (2004). A comparative study of psychopathology in Greek adolescents in Germany and in Greece in 1980 and 1998-18years apart. *European Archives of Psychiatry & Clinical Neuroscience*, 254, 27-35.
- Gabriel, S. & Gardner, W. M. (1999). Are there "his" and "hers" types of interdependence? The implications of gender differences in collective versus relational interdependence for affect, behavior, and cogni-

- tion. *Journal of personality and social psychology*, 77, 642-655.
- Garber, J. (2006). Depression in children and adolescents: linking risk research and prevention. *American Journal of Preventive Medicine*, 31, S104-125.
- Ge X, Frederick, O. Lorenx, D. D., Conger, G. H., Elder, Jr., & Ronald, L. S. (1994). Trajectories of Stressful Life Events and Depressive Symptoms During Adolescence. *Developmental Psychology*, 30(4), 467-483.
- Goodyer, I. M., & Altham, P. M. E. (1991). Lifetime exit events and recent social and family adversities in anxious and depressed school-age children and adolescents, *Journal of Affective Disorders*, 21, 219-228.
- Gotlib, I. H., Lewinsohn, P. M., & Seeley, J. R. (1995). Symptoms versus a diagnosis of depression: Differences in psychosocial functioning. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 63, 90-100.
- Gore, S., Aseltine, R. H., & Colten, M. E. (1993). Gender, Social-relational involvement and depression. *Journal of Research on Adolescents*, 3, 101-125.
- Hammen, C. (1991). The generation of stress in the course of unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 555-561.
- Hammen, C. (1992). Life events and depression: The plot thickens. *American Journal of Community Psychology*, 20, 179-193.
- Hammen, C. & Rudolph, K. D. (2003). Childhood Mood Disorders. In Eric, J. M., Russell A. B. (Eds.) *Child psychopathology*, (2nd ed). pp. 233-278. New York, Guilford Press.
- Hankin BL, Mermelstein R, Roesch L. (2007). Sex differences in adolescent depression: stress exposure and reactivity models. *Child Development*, 78(1), 279-95.
- Hays, R. D., Wells, K. B., Sherbourne, C. D., et al. (1995). Functioning and well-being outcomes of patients with depression compared with chronic general medical illness. *Archives of General Psychopathology*, 8, 761-777.
- 平田乃美・菅野純・小泉英二 (1999). 不登校中学生の学校環境認知の特性について. *カウンセリング研究*, 32, 124-133.
- 堀野緑・森和代 (1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関係に介在する達成動機の要因. *教育心理学研究*, 39, 308-315.
- 石川信一・戸ヶ崎泰子・佐藤正二・佐藤容子 (2006). 児童青年に対する抑うつ予防プログラム—現状と課題—. *教育心理学研究*, 54, 572-584.
- 今津芳恵 (2005). 社会的スキルの欠如が抑うつに及ぼす影響—女子中学生を対象とした場合—. *心理学研究*, 76(5), 474-479.
- Jylha, P., & Isometsa, E. (2006). Temperament, character and symptoms of anxiety and depression in the general population. *European Psychiatry* 21(6), 389-95.
- 風祭元 (編) (2000). 現代の抑うつ 日本評論社
- Kim, J. & Cicchetti, D. 2006 Longitudinal trajectories of self-system process and depressive symptoms among maltreated and nonmaltreated children. *Child development*, 77(3), 624-639.
- 菊島勝也 (1999). スレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響. *性格心理学研究*, 7(2), 66-76.
- 黒田祐二・桜井茂男 (2003). 中学生の人間関係における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム—ディストレス/ユーストレス生成モデルの検討—. *教育心理学研究*, 51, 86-95.
- Maccoby, E. E. (1990). Gender and relationships: A developmental account. *American Psychologist*, 45, 513-520.
- 丸山笑里佳 中学生の抑うつの特徴と抑うつ状態の変化. 児童青年医学とその近接領域 (投稿中).
- 皆川邦直 (1980). 思春期・青年期の精神分析的発達理論—ピーターブロスの研究をめぐって— 小此木啓吾 (編) 青年の精神病理2 弘文堂 p43-166.
- 宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係 (第6章) 落合良行・楠見孝 (編) 講座生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し: 青年期 金子書房 p155-184
- 三浦正江 (2006). 中学校におけるストレスチェックリストの活用と効果の検討—不登校の予防といった視点から—. *教育心理学研究*, 54, 124-134.
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 (2003). 中学生を取り巻くヘルパーからのソーシャルサポートと適応に関する研究. *コミュニティ心理学研究*, 7(1), 35-46.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性のつきあい方からみた青年期の友人関係. *青年心理学研究*, 10, 35-47.
- 中根允文・本田純久 (2001). 保健福祉動向調査において実施したCES-D調査の解析研究. 厚生労働省保健福祉動向調査において実施したCES-D調査の解析研究報告書, 1-4.

- 難波 久美子 (2004). 日本における青年期後期の友人関係研究について. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 51, 107-116.
- Nezlek, J. B. & Allen, M. R. (2006). Social support as a moderator of day-to-day relationships between daily negative events and daily psychological well-being. *European Journal of Personality*, 20, 53-68.
- 野添新一・古賀靖之 (1990). 登校拒否・不登校の原因をさぐる 坂野雄二 (編) メンタルヘルス・シリーズ 登校拒否・不登校 同朋舎 pp.37-72.
- Nolen-Hoeksema, S., Girgus, J. S., Seligman, M. E. (1992). Predictors and consequences of childhood depressive symptoms: A 5-year longitudinal study. *Journal of Abnormal Psychology*, 31(3), 405-422
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—. 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化. 教育心理学研究, 44(1), 55-65.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係. 心理学研究, 63(5), 310-318.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果. 教育心理学研究, 41, 301-312.
- Richard, A. G., Thomas R. P., Edward, L. S. & Cloninger, C. R., (2002). Personality and depressive symptoms: a multi-dimensional analysis. *Journal of Affective Disorders*, 74(2), 123-130.
- Rudolph, K. D. (2002). Gender differences in emotional responses to interpersonal stress during adolescence. *Journal of Adolescent Health*, 30(4), 3-13.
- Rudolph, K.D & Hammen, C. (1999). Age and gender as determinants of stress exposure, generation, and reactions in youngsters: a transactional perspective. *Child Development*, 70(3), 60-77.
- Rudolph, K. D., Hammen, C., & Burge, D. (1994). Interpersonal functioning and depressive symptoms in childhood: Addressing the issues of specificity and co morbidity. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 25, 447-475.
- 齋藤万比古 (2005). 思春期の病的理解 臨床心理学 5(3) 355-360
- 坂本真士・大野裕 (2005). 抑うつ時の臨床心理学 坂本真士・丹野義彦・大野裕 (編) 第1章 抑うつとは 東京大学出版会 pp.7-27.
- Sullivan, H. S. (1953). Conceptions of modern psychiatry. W. W. Norton.
- 中井久夫・高倉実・崎原盛造・與古田孝夫・新屋信雄 (2000). 中学生における抑うつ症状と心理社会的要因との関連. 学校保健研究, 42, 49-58.
- Tanaka E, Sakamoto S, Kijima N & Kitamura T. (1999). Different personalities between depression and anxiety. *Journal of Clinical psychology*, 84(8), 1043-1051
- 田中麻未 (2006). パーソナリティ特性およびネガティブ・ライフイベントが思春期の抑うつに及ぼす影響. パーソナリティ研究, 14(2), 149-160.
- 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野祐二 (1997). 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係. 10(1), 23-32.
- 山口隆 (訳) (1976). 現代精神医学の概念. みすず書房.
- 山本淳子・仲田洋子・小林正幸 (2000). 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連. カウンセリング研究, 33(3), 235-248.
- 和田実 (1996). 同性の友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, 67, 232-237.
- West, P. & Sweeting, H. (2003). Fifteen, female and stressed: changing patterns of psychological distress over time, *Journal of Child Psychology & Psychiatry & Allied Disciplines*, 44, 399-411.

(2007年9月28日受稿)

ABSTRACT

A Review of Researches on Adolescent Depression and Friendship

Erika MARUYAMA

Much of the research revealed that interpersonal relationships have strong association with depression in adolescence. Peer relationships are especially important for adolescence. The present article reviews the feature of peer relationships in adolescence and point out importance of peer relationships. For adolescents, there are some meanings to have close friends. Boys and girls have different relationship style for peer relationships. Adolescent girls' relationships seem to be characterized by greater levels of intimacy, emotional support, and self-disclosure, whereas tendency for boys to socialize within larger peer groups may lead them to value status and the achievement of dominance respect. Some studies suggested that girls have more friendship stressors. In addition, girls are more vulnerable to depressive reactions than boys. And this article also reviews the studies investigated peer relationship stress, depression, and another factors for Junior high school students in Japan. Finally, Imprecations for practice and for research were discussed.

Key words : depressive symptoms, adolescents, interpersonal stress, peer relationships